

## 今週の為替相場見通し(2022年8月22日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		132.56 ~ 137.22	137.02	135.00 ~ 139.50
ユーロ	(ドル)		1.0032 ~ 1.0269	1.0040	0.9800 ~ 1.0300
(1ユーロ=)	(円)		134.95 ~ 137.95	137.45	135.00 ~ 139.00
英ポンド	(ドル)		1.1793 ~ 1.2149	1.1832	1.1600 ~ 1.1900
(1英ポンド=)	(円)	*	160.09 ~ 163.57	162.05	160.00 ~ 163.50
豪ドル	(ドル)		0.6860 ~ 0.7125	0.6875	0.6800 ~ 0.6950
(1豪ドル=)	(円)	*	93.07 ~ 95.10	94.17	93.30 ~ 94.80

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 135.00 ~ 139.50 円

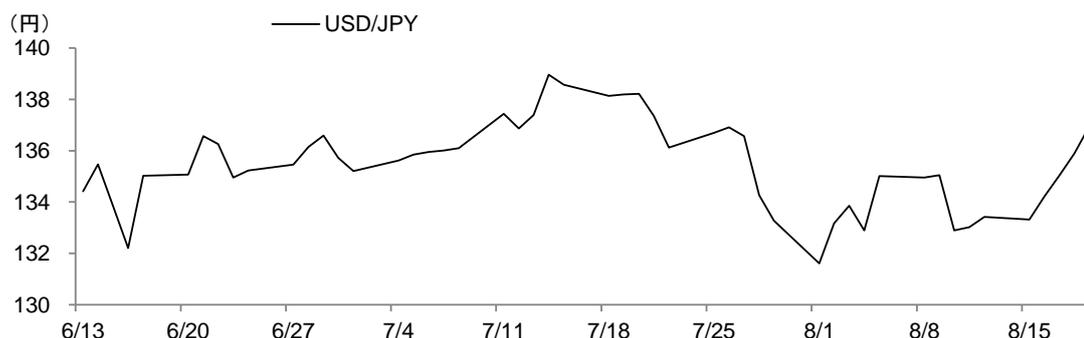
## (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は週後半にかけて続伸。堅調な推移となった。週初15日、133.30円でオープンしたドル/円は複数の中国の経済指標の冴えない結果に景気減速懸念が高まりリスク回避の円買いの動きが強まった。海外時間では米8月NY連銀製造業景気指数が急低下したことで一時週安値の132.56円まで下落。その後は米株が持ち直したことで133円台を回復した。16日、ドル/円は新規材料に乏しい中、133円台前半で小動きだったが、海外時間では米金利上昇や米7月鉱工業生産の市場を上回る結果にドル買いが強まり134円台半ばまで上昇した。17日、ドル/円は東京時間に下げ幅を拓げ134円台を割り込んだが、海外時間では米7月小売売上高の結果や前日からの米金利上昇に伴うドル買いにサポートされて135円台半ばまで急伸。その後は7月FOMC議事要旨で将来的な政策金利引き上げペース緩和の可能性が示唆され、ドル売りが加速し135円台前半まで下落した。18日、ドル/円は米長期金利低下に一時134円台半ばまで続落したが、その後は米8月フィラデルフィア連銀製造景況指数の力強い結果やタカ派的なFed要人発言に一時135.90円まで急上昇した。19日、ドル/円は東京時間には実質5・10日の実需によるドル買いから仲値にかけて136円台に続伸。海外時間では堅調な米金利に加え、タカ派的なFed要人発言もサポート材料視されドル/円は137.22円まで上昇。結局、137.02円で越週した。

今週のドル/円相場は底堅い推移を予想する。先週のFed要人発言では9月FOMCでの+75bp利上げの可能性を残す等のタカ派的な発言が続く。係る状況下で25日に開催されるジャクソンホール経済シンポジウムでは9月の利上げ幅と年内のFF金利水準についてのパウエルFRB議長の他、Fed要人発言に注目したい。「データ次第」ではあるがタイトな労働環境下での賃金上昇や絶対的な物価水準が高い中でスタンス変更は考え難く、素直に米金利の上昇とドル高を基本線としたい。加えて、足許の原油相場の上昇は一服したものの先週17日(水)に発表された本邦7月の貿易収支は過去最大の貿易赤字を記録しておりファンダメンタルズから見てもドル/円の上昇のサポート要因となろう。一方で、7月FOMC以降、経済指標の結果に左右される相場は続いており、米経済指標等で景気減速懸念が再燃すれば一時的にリスク回避の円買いに伴うドル/円相場の上昇が一服する可能性もある点には留意したい。尚、今週は23日(火)米8月製造業・サービス業・総合PMI、米7月新規住宅販売件数、26日(金)に米7月個人消費・支出、米7月コアPCEデフレーター等の発表を控えている。

## (3) 先週までの相場の推移

先週(8/15~8/19)の値動き: 安値 132.56 円 高値 137.22 円 終値 137.02 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 0.9800 ~ 1.0300 135.00 ~ 139.00 円

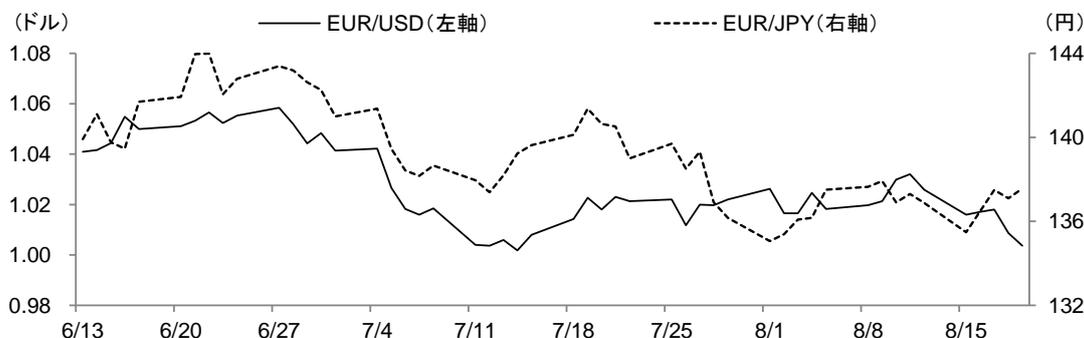
### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は続落し、上値の重い展開となった。週初15日、1.0255でオープンしたユーロ/ドルは直後に一時週高値の1.0269まで上値を伸ばすも、海外時間では原油先物価格の急落や独7月卸売物価指数の低下に加え、独長期金利低下も相まって1.01台半ばまで急落。16日、ユーロ/ドルは1.01台半ばでの揉み合いだったが、欧州時間に入り、独8月ZEW景気指数の冴えない結果に1.01台半ばまで下落。その後は欧州株の堅調推移や独長期金利の持ち直しにユーロ買いが強まり1.01台後半まで反発した。17日、ユーロ/ドルはユーロ圏4~6月期GDPの下方修正を受けて1.01台半ばまで下落も、その後は7月FOMC議事要旨のハト派的な内容を受けドル売りが加速、1.02ちょうど付近まで持ち直した。18日、ユーロ/ドルは複数の米経済指標の良好な結果や米当局者の相次ぐタカ派的な発言を受けドル買い優勢となり、一時1.0080まで急落。週末19日のユーロ/ドルもドル買いの流れが継続し続落、週安値の1.0032をつけ、1.00台前半にてクローズした。

今週もユーロ/ドルは上値重い推移が継続すると予想。また、対円でもドル高・円安が進行しているのでユーロ/円はレンジ推移を予想している。先週は複数のFRB高官から利上げに対するタカ派的な発言が相次ぎ、米国における足許の利上げ期待が高まり、ドル高となった。これにより、ユーロ/ドルは再び1.00台前半まで下落、パリティ(1ユーロ=1ドル)に近づくほどのユーロ安水準となった。一方で、ユーロ圏では天然ガスなどのエネルギー逼迫が懸念されており、このことがユーロの上値を重くしている。これらのドル高・ユーロ安要因は今週も継続すると見ており、ユーロ/ドルは上値重く推移するだろう。ただし、対円でもドル高が進行しているので、ユーロ/円はレンジ取引を予想している。また、今週は25日(木)に7月ECB議事要旨の公表が予定されており、9月のECB政策理事会における利上げの手がかりとなる内容があるか注目が集まる。但し、たとえタカ派的な内容が確認できたとしても、足許米国の9月利上げ期待も高まっている為、相場への影響は限定的と考えている。更に、前述の通りユーロ/ドルはパリティに近づいているため、パリティ割れを試す場面が見られると予想している。パリティを割り込むことができないと、ユーロ高方向に反発するリスクも想定している。

### (3) 先週までの相場の推移

先週(8/15~8/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.0032 高値 1.0269 終値 1.0040  
(対円) 安値 134.95 高値 137.95 終値 137.45



(資料)ブルームバーグ

### 3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1900 160.00 ~ 163.50 円

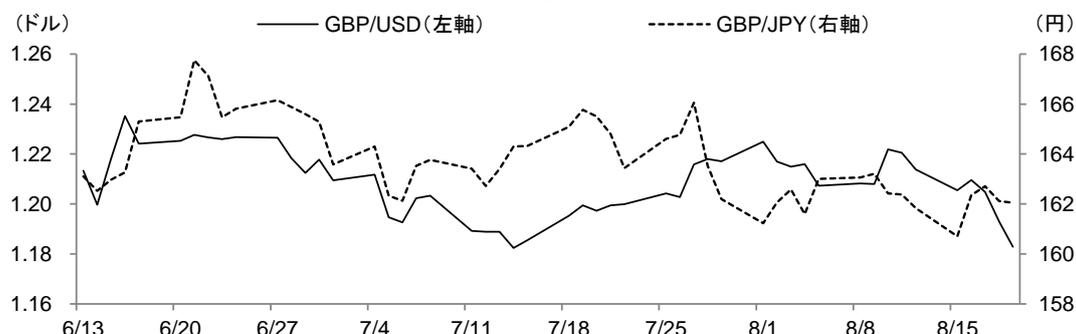
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドルでは軟調気味の横ばい先行から、週引けにかけて下げ足を強め、7月につけた28か月ぶりの安値に迫る水準まで下落。対円でも下落が先行したものの、16日以降、並行した円反落の流れの中で早々に反発、週引けを前に再び軟調に転じ、週を振り返ると概ね横ばい。対ユーロでは逆に上昇が先行したものの、17日に天井を打って反落、その後週引けまで下押しを続け、振り返って水準を小幅引き下げた。一連の値動きから読み取れたのは、週前半は円の乱高下が値動きをけん引した一方、週後半はドル全面高とポンド全面安が同時に進んだという構図。週後半のポンド安進行のきっかけを提供したのは、17日に発表された英7月CPIの上振れ。市場予想が前年比+9.8%だったところ、発表は同+10.1%と40年ぶりの二桁上昇。物価上昇は、政策金利引き上げへの連想で通貨買い要因にもなり得たはずだが、ポンド下落につながったのは、英景気の先行きに対する不安を強めたことに加え、英国債の急落が嫌気された結果と考えられた。英10年国債の利回りは、2.10%程度の水準から、3営業日で35bp前後上昇した。英国債利回り上昇の背景には、「英中銀が物価抑制に失敗する」との警戒感があったものと考えられたが、同中銀が、今月の金融政策委員会で、(資産購入策で購入した)保有国債の売却にむけた具体的な道筋を示したばかりだったこと、次期首相の有力候補とされるトラス外相が拡大的な財政政策を志向していることなども影響したものと考えられた。19日のポンド全面安(続落)には、同日発表された英7月小売上高の下振れ(小幅ながら)も重石になったものと考えられた。

今週の英ポンド相場は、対ドルで、28か月ぶりの安値(7月14日につけた1.1761)を試す展開を予想、安値を更新する可能性も現実的に警戒されよう。足許ドルの堅調が通貨市場の潮流を形作っている点を疑う余地は少ない。その背景には、具体的な要因として、米連銀が金融引き締め(利上げ)に先行した事実、現時点でも明確な引き締め継続方針を示していること、他主要経済との比較で米景気が最も底堅いこと、特に労働市場の堅調と相対的に高い賃金の伸び(物価押し上げ=追加利上げ要因でもある)などを挙げることができよう。ただし、米中経済摩擦、新型コロナ禍、ウクライナ戦争などの危機が同時進行する、先行き不透明感が著しく強い世界において、保有資産の現金回金が進んでいることもドル独り勝ちの背景にあるのではなからうか。現金回金と言えば、従来は自国通貨への回金で、経常黒字を抱える日本やユーロ圏(独)への回金が顕著な局面もあったが、昨今の燃料価格高騰で、いずれも貿易赤字を計上する状況に陥っている。一方で、引き続き「基軸通貨」として圧倒的な存在感を維持しているドルに、安住先を見つけれない世界の資金が集まっていると考えるのは、あながち的外れな推測とも思えない(こうした動きをひとりで「有事のドル買い」と形容することもできよう)。投資市場のドル依存の強まりとは対照的に、ポンドへの信頼感が決して高いとは言えないのは、英中銀と市場の対話が必ずしも円滑に見えないことに加え、英政局不透明感(ジョンソン首相退陣)やブレクジットを巡る混乱(アイルランド議定書問題など)といった要因を挙げることができる。ドルに対するポンドの劣勢が鮮明な中、対ドルでの安値更新はその他主要通貨に対してもポンドが弱含む可能性を示唆するが、ユーロには「隣国で戦争が進行中」、円には「日銀が断固とした金融緩和を継続中」というそれぞれの弱みがあり、対ドルほど明確な下落基調を確立する可能性は低いものと予想される。

#### (3) 先週末までの相場の推移

先週(8/15~8/19)の値動き: (対ドル) 安値 1.1793 高値 1.2149 終値 1.1832  
(対円) 安値 160.09 高値 163.57 終値 162.05



(資料)ブルームバーグ

## 4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1)今週の予想レンジ: 0.6800 ~ 0.6950 93.30 ~ 94.80 円

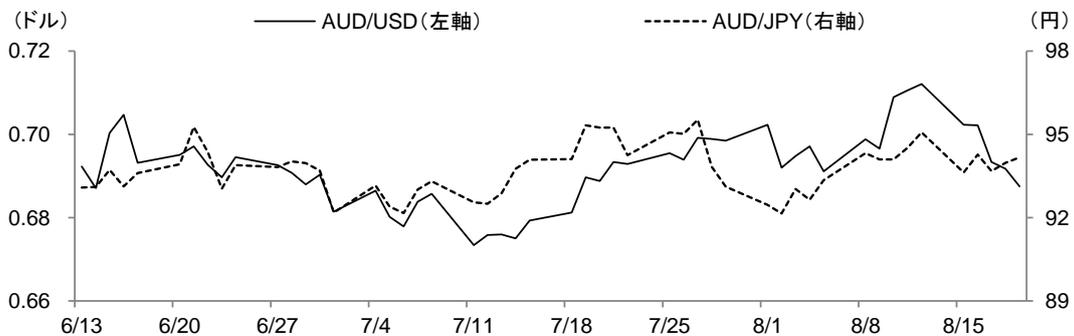
### (2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は0.71台前半から0.68台半ばまで下落。15日、中国人民銀行が中期貸出制度の1年物金利を予想に反して2.75%に引き下げ、7日物リバースレポ金利を10bp引き下げ2%とすることを発表すると、人民元が大きく下落。更に中国7月主要経済指標の悪化、米8月NY連銀製造業景気指数の下振れなどを背景に、リスクオフの米ドル買いの動きが強まり豪ドルは下値を追う展開に0.70前半まで低下。16日、この日発表されたRBA議事要旨では、前月までは主に海外要因主導によるインフレ上昇を指摘していたものが、今月の議事要旨では国内要因が大きく影響を与えているとし、インフレ圧力への認識の高まりを印象付けた。これを受けて豪ドルは小幅上昇となったがすぐに失速。米国の小売り関連企業の決算発表が強かったことで、米株が上昇するも、米金利の上昇を受けた米ドル高の流れとなり、豪ドルは0.70台前半でもみ合い。17日、豪4~6月期賃金指数が約8年ぶりの高い伸びを示したものの事前予想には届かず、豪ドルは売りで反応し一時0.69台後半まで下落。その後RBNZが+50bp利上げを発表すると同時に政策金利のピーク予想を3.9%から4.1%に引き上げ、声明文の内容も想定以上にタカ派的だったことを受け、NZドルが大きく上昇。豪ドルも連れ高となるも買いは続かず。英7月CPIが前年比10.1%とのヘッドラインが流れると英国債主導で売りがかさみ、米国債も下落(金利上昇)。これを受けてドル指数が大きく上昇する中、豪ドルは下値を追う展開となり0.69台前半まで下落。18日、豪7月雇用統計では雇用者数が予想外の減少となり豪ドルは売りで反応したが、すぐに下落幅を縮小。米8月フィラデルフィア連銀製造業景況観指数が予想比上振れたことで米ドルの買いフローが強まると0.69台前半まで下落した。19日、特段注目される経済指標の発表がない中、米リッチモンド連銀総裁によるタカ派発言などを背景に米債利回りが上昇、米株価格は下落。豪ドルはもみ合いながら0.68台半ばまで下落して越週。

今週の豪ドルは頭の重い展開を予想する。先週は中国経済指標やNY連銀製造業景気指数の大幅な下振れ等をきっかけに米ドル買い圧力が強まり、豪ドルは大きく下落した。豪賃金指数の伸びが予想に届かなかったことも重しとなった。今週は特段注目される国内指標の発表が無い中、25日(木)に予定されているジャクソンホール経済シンポジウムにおけるパウエルFRB議長の講演に市場の注目が集まっている。パウエルFRB議長講演ではインフレ抑制に対するコミットメントを再度強調しタカ派姿勢を維持することが予想されており、豪ドルは頭の重い値動きとなろう。尚、先週、豪州連邦統計局は初の月次CPIを発表した。統計局はよりタイムリーな情報を発信する為、10月以降一部の指標について月次で発表する予定。四半期CPIがRBAの参考指標であることは変わらないものの、月次CPIについても市場の関心を集めることになる。

### (3)先週までの相場の推移

先週(8/15~8/19)の値動き: (対ドル) 安値 0.6860 高値 0.7125 終値 0.6875  
(対円) 安値 93.07 高値 95.10 終値 94.17



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。